

# 飯氏二塚古墳 2

— 飯氏二塚古墳第2次調査報告 —

2003

福岡市教育委員会

# 飯氏二塚古墳 2

— 飯氏二塚古墳第2次調査報告 —



遺 蹤 略 号 IJK-2  
遺跡調査番号 0246

2003

福岡市教育委員会



## 序

西日本屈指の都市として今なお発展を続ける福岡市はまた、古くより大陸文化の受け入れ口の役目を果たし、豊富な文化財が今なお地下に眠る街でもあります。都市化と埋蔵文化財の保護は相容れないことが常ですが、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりを心がけ、これを子供たちに伝えていくことが現代を生きる我々の責務であると言えましょう。

福岡市教育委員会では、このような将来にわたって保護・保存すべき文化財のひとつとして今宿地区の前方後円墳群を取り上げ、20年以上にわたって国庫補助を受けて調査を継続してきました。本書におさめた飯氏二塚古墳の調査は、この一環として、基礎資料の収集を目的に実施したものです。

調査に際しては、文化庁・福岡教育委員会のご指導のもと、地権者をはじめ、地元の皆様には快くご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができましたことをお礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助とならんことを願います。

平成15年8月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

## 例　　言

1. 本書は平成14年11月15日から平成15年1月15日に福岡市教育委員会が行った、西区飯氏字鏡原792他所在の飯氏二塚古墳第2次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は重要遺跡確認調査として行い、調査及び報告書作成には国庫補助を受けた。
3. 本書に使用した遺構実測図は、吉武　学が作製した。
4. 本書に使用した遺物実測図は、吉武、田中克子が作製した。
5. 本書に使用した写真は、吉武が撮影した。
6. 本書に使用した図の製図は田中、上塘貴代子、萩尾朱美、森　寿恵が行った。
7. 本書に使用した方位は全て磁北である。
8. 本書の執筆・編集は山崎純男の助言のもとに吉武が行った。
9. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	0 2 4 6		遺跡略号	IJK-2	
調査地地籍	西区飯氏字鏡原792他		分布地図番号	121 飯氏 0881	
開発面積	-	調査対象面積	-	調査面積	110m <sup>2</sup>
調査期間	2002年（平成14年）11月15日～2003年（平成15年）1月15日				

# 本文目次

第一章　はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 飯氏二塚古墳の位置と既往の調査	2
第二章　発掘調査の記録	
1. 発掘調査の方法と経過	4
2. 発掘調査の概要	4
3. 墳丘の範囲確認調査	6
(1) 201号トレンチ	6
(2) 202号トレンチ	6
(3) 203号トレンチ	6
(4) 各トレンチの出土遺物	8
(5) 墳丘について	8
4. 石室の調査	10
(1) 掘り方	10
(2) 墓道	10
(3) 閉塞	10
(4) その他	15
(5) 出土遺物	15
第三章　おわりに	18

# 挿図目次

Fig. 1 飯氏二塚古墳の位置 (1/20,000)	2
Fig. 2 飯氏二塚古墳の周辺地形 (1/1,500)	3
Fig. 3 第2次調査区の位置 (1/400)	5
Fig. 4 201号トレンチ (1/80)	6
Fig. 5 202号・203号トレンチ (1/80)	7
Fig. 6 201号～203号トレンチ出土遺物 (2・3は1/8、他は1/3)	8
Fig. 7 飯氏二塚古墳の墳丘とトレンチの位置 (1/200)	9
Fig. 8 石室の調査区と掘り方 (1/60)	11
Fig. 9 石室トレンチの土層断面・I (1/40)	12
Fig. 10 石室トレンチの土層断面・II (1/40)	13
Fig. 11 墓道調査区の土層断面・I (1/40)	14

Fig.12	墓道調査区の土層断面・Ⅱ (1/40) .....	15
Fig.13	横穴式石室 (1/50) .....	16
Fig.14	墓道・石室調査区の出土遺物 (14～16は1/2、17は1/1、他は1/3) .....	17
Fig.15	飯氏二塚古墳墳丘復元案 (1/400) .....	18

## 図版目次

PL. 1	1. 201号トレンチ全景 (北東から) 3. 201号トレンチ全景 (西から)	2. 201号トレンチの地山整形 (北から) 4. 墓棺墓検出状況 (東から)
PL. 2	1. 202号トレンチ全景 (北西から) 3. 202号トレンチ段落ち部分 (東から)	2. 202号トレンチ墳端部分 (南東から)
PL. 3	1. 203号トレンチ全景 (北から)	2. 203号トレンチ全景 (南から)
PL. 4	1. 石室奥壁トレンチ (東から)	2. 石室奥壁の掘り方 (東から)
PL. 5	1. 石室西側壁トレンチ (東から)	2. 石室西側壁の掘り方 (東から)
PL. 6	1. 石室東側壁トレンチ (西から)	2. 石室東側壁の掘り方 (西から)
PL. 7	1. 墓道から石室を望む (南東から)	2. 墓道調査区南壁土層断面 (北西から)
PL. 8	1. 墓道調査区西壁土層断面 (北東から)	2. 墓道調査区東壁土層断面 (南西から)

# 第一章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

飯氏二塚古墳の第1次調査は、古墳の構造と時期を明らかにする目的で、平成5年（1993）2月7日～6月16日に埋蔵文化財課が重要遺跡確認調査として行い、「飯氏二塚古墳 福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集 福岡市教育委員会 1995」として調査報告書を刊行した。この調査により、これまで明らかでなかった墳丘施設や主体部の構造、古墳の築造時期などを確認することができ、多大な成果を挙げた。一方、古墳周囲の平坦地形部分までトレンチが及ばず、周溝の有無一つまでは古墳の規模について不確定であったことや、石室掘り方の確認、墓道の調査などが課題として残された。更に、調査後10年近くを経、トレンチの一部が陥没し、不法投棄された粗大ゴミも目立つなどの問題が起きてきた。今回の第2次調査はこれらの諸問題の解消を目的として行ったものである。

調査に先立ち、地権者への説明を11月上旬に行い、調査に対する同意を求めた。その後、周辺住民への事前通知を行うなど、準備作業を進めた。発掘調査は平成14年（2002）11月15日～平成15年1月15日に埋蔵文化財課が国庫補助事業として実施し、整理・報告書作成は平成15年度に実施した。

## 2. 調査の組織

調査にあたり、下記の地権者の方々には、ご理解と多大なご協力を頂いた。また、濱地潔氏には水の提供を頂いた。厚く感謝申しあげたい。

**地 権 者** 川上孝愛、川上友徳、久保勝助（久保 雄）、谷 義湊、矢野吉男（五十音順、敬省略）

また、調査は以下の組織で行った。

**調査主体** 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

**調査総括** 埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第2係長 田中壽夫

**調査庶務** 文化財整備課管理係 御手洗 清

**調査担当** 埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第2係 吉武 學

**調査協力** 阿比留 治、網田昭雄、石川正志、石田照江、犬童陽子、大塙 皓、木戸アサノ、  
木戸和子、久保靖男、倉光政彦、近藤ノリ子、清水 明、柴田シズノ、柴田種美、  
柴田ツネ子、柴田トシ、末松美佐子、徳安勝也、富永謙夫、友池富美恵、中田トメ子、  
中村栄子、西田マキエ、平野義光、平山栄一郎、深見佳子、細川虎男、馬奈木留雄、  
森友ナカ、吉鹿裕隆（五十音順、敬省略）

**整理調査員** 田中克子

**整理協力** 上塘貴代子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬省略）

### 3. 飯氏二塚古墳の位置と既往の調査

飯氏二塚古墳は福岡市西区飯氏字鏡原792他に所在する前方後円墳である。立地としては、高祖山山麓から北西に伸びた低い丘陵上にあり、その独立した高まりを利用して造営されている。周辺には、このような高まりや、あるいは更に低い台地を利用した前方後円墳が造られ、これとは別に、より高い丘陵上には多数の小円墳群とその盟主的存在とみられる小型の前方後円墳が少数展開している。

高祖山山麓に展開するこれらの前方後円墳は、東にやや離れて位置する鷹崎古墳を含めてひとつの古墳群を形成しているが、既に消滅したものを除き、計13基のうち11基に対して既に何らかの調査が行われた。また、山の鼻1号、飯氏二塚、兜塚など、調査が不充分なものに対する第2次調査も重ねられたが、新たに発見された飯氏鏡原古墳（仮称）等、なお詳細不明な部分も多く、丘陵上に展開する群集墳を始めとする古墳群とともに、今後も実態解明のための継続調査が望まれる。

これら前方後円墳の各々の内容は各報告書に詳しいが、ここでは飯氏二塚古墳の第1次調査の概要について簡単にまとめておく。

飯氏二塚古墳は、1993年2月7日～6月16日に3,500m<sup>2</sup>の範囲を調査した。墳丘については、前方部・後円部ともに二段築成で比高差がないこと、葺石が回るが埴輪はないこと、墳丘全体が盛土で、一段目の残りが良くないことなどが判明した。規模は全長約48m、後円部径約23m、前方部幅33m、現況の墳丘高約5mで、主軸方位は磁北より東に57.5度偏する。後円部中央に位置する埋葬主体は、古墳主軸に直交する单室の横穴式石室で、花崗岩を用いるが石抜きのため残りが極めて悪い。玄室は長軸35m、玄門部幅・奥壁幅はともに2.3mほどの矩形プランで中央部が膨らみ、短い羨道を持つ。民家が隣接するため羨道からの調査はできなかったが、閉塞石及びその両側に墓道とみられる石積みの一部を確認した。遺物は馬具の他、くびれ部から須恵器がまとまって出土しており、陶邑編年のMT-15型式の特徴を示す。



Fig. 1 飯氏二塚古墳の位置 (1/20,000)

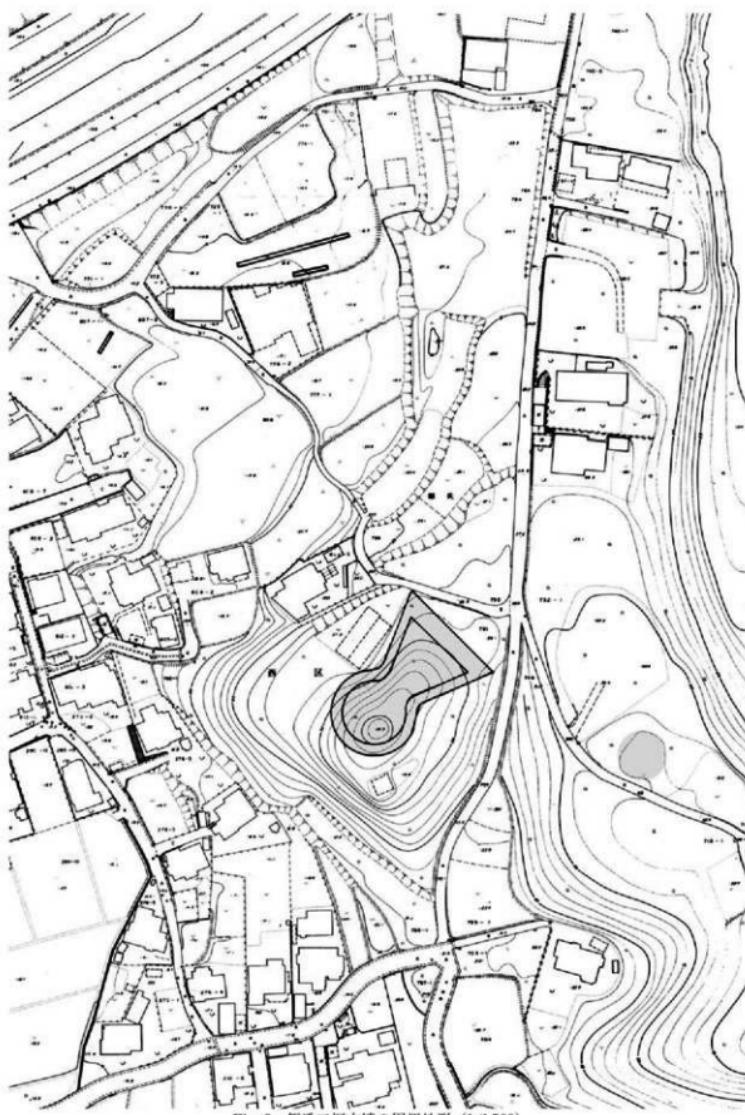


Fig. 2 鍋氏二塚古墳の周辺地形 (1/1,500)

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の方法と経過

前項で述べたように、調査の目的は以下の4点である。①古墳周溝の有無の確認、②石室掘り方の確認、③墓道の確認、④旧トレンチの埋め戻しと不法投棄されたゴミの処理。

調査はまず、ゴミ処理と古墳周囲の平坦地の下草刈り取りから開始し、その後、古墳周囲の平坦地に3ヶ所のトレンチを設けた。次に、これらのトレンチの記録を行なながら、石室埋め土（第1次調査の埋め戻し土）の除去を行ったが、思いの外土量が多く排土に手間取ることになったため、途中からベルトコンベアを導入した。埋め土の除去後、石室掘り方と墓道の確認調査を行った。

調査記録の作成には、第1次調査のトラバース杭（任意）を用いた。杭は約半数が失われており、残っていた杭について再度計測を行った。標高も第1次調査のものを使用した。記録は各調査区の平板測量、平面実測、土層断面実測、及び写真撮影によった。

調査後、陥没した第1次調査トレンチを含め、土叢で土留めを行なながら全ての調査区を掘削土で埋め戻したが、石室のみは底面を厚さ50cmのマサ土で覆った。掘削と埋め戻しは全て人手による。

### 2. 発掘調査の概要

古墳周囲の平坦地に周溝の存在が示唆されたため、南側を除く三方にトレンチを入れた。トレンチは古墳主軸に平行、又は直交するよう意図し、第1次調査トレンチとの整合性を考慮して設け、地形の許す限り極力長めに掘削した。東から順に201～203号トレンチと呼ぶ。201号トレンチでは、一部に地山整形による崖みも見られ、3本のうちでは比較的残りが良いが、古墳に関連する施設は確認できなかった。他はいずれも表土直下で花崗岩風化礫層となり、開墾などにより削平を受けていた。

次に、石室掘り方の確認のため、石室の両側壁（東・西）と奥壁（北）に幅80cm、高さ4m強のトレンチ計3本を設けた。破壊を最小限に留めるため、掘削は掘り方が確認できるまでとした。いずれのトレンチにおいても、石室床面より25～60cmほど高いレベルに古墳築造前の旧表土とみられる灰黒色土が現れ、これを掘り込んで石室を組んでいることが分かった。

墓道部分は樹木を避け3.5×2mの範囲で掘削を行った。第1次調査でも確認した閉塞石両側の石積みは、石室主軸と直交する方向に大きく開き、墓道側壁の貼り石となることが判明した。この前面（南側）の埋土は版築によって非常に堅く締められているが、貼り石を境にして墳丘側（北側）の版築とは状況が一変しており、墳丘築造より後に埋められた（貼り石で飾られた前庭部を開いていた一時期があった）ことが明らかである。さらに南壁の土層断面の観察により、掘削時に盜掘坑と考えて掘り下げた部分の下に、追埋葬の墓道と思われる溝状の窪みが一部存在することが分かった。この墓道の版築は貼り石前面ほど丁寧ではない。また、時期を示す遺物は出土していない。

以上の他、古墳以外の遺構として、201号トレンチで壺棺墓3基（未掘）、石室東壁側トレンチで古墳築造前の遺構（落ち込み）を確認した。第1次調査でも壺棺墓が確認されており、古墳墳丘下および周辺には、弥生時代中期を中心とする墓地と、古墳時代前期の集落が存在するものと考えられる。

遺物は、古墳周囲のトレンチから壺棺片、須恵器片等が、石室調査区から弥生土器、古式土師器、黒曜石、龍泉窯系青磁などの破片が、あわせてコンテナ2箱分出土した。

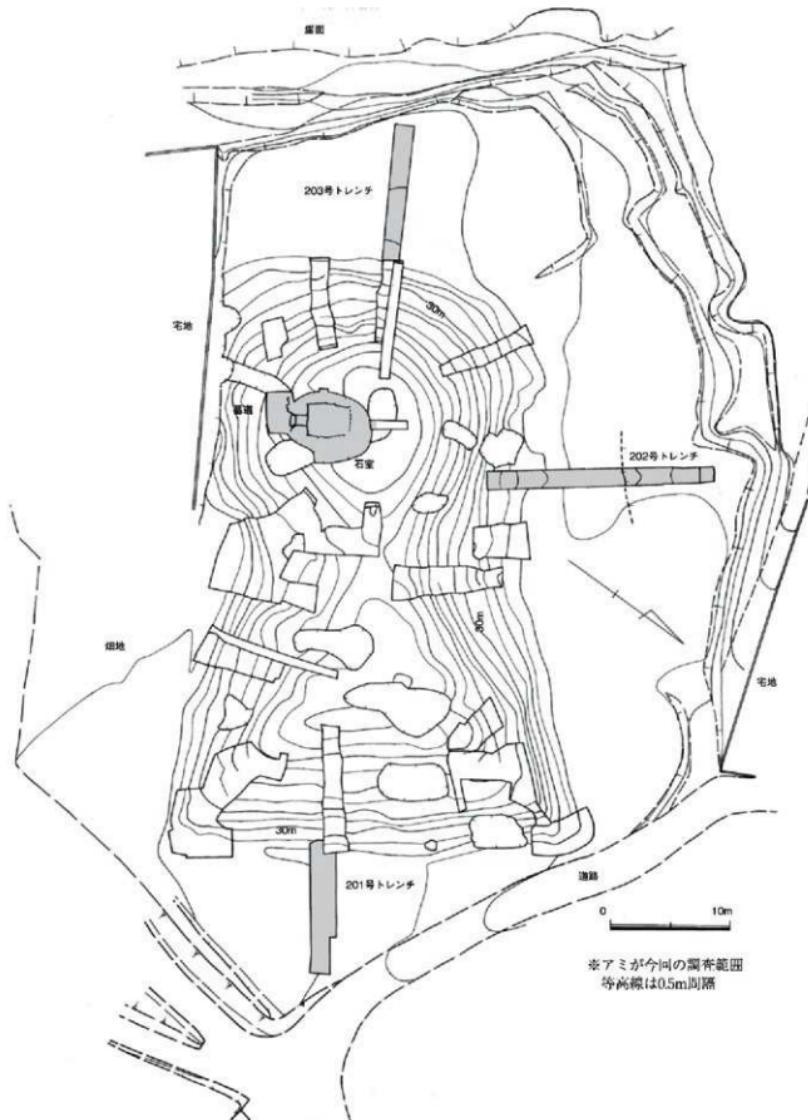


Fig. 3 第2次調査区の位置 (1/400)

### 3. 墳丘の範囲確認調査

飯氏二塚古墳は、規模こそ異なるものの、築造時期・墳形等が今宿大塚古墳に近似しており、更に周囲には平坦地が広がっていることから、周溝の存在を示唆するに充分な条件が揃っていた。そこで宅地となっている南側を除く三方にトレンチを設定し、その有無について確認調査を行った。

#### (1) 201号トレンチ Fig.4、PL.1

前方部前面に古墳長軸方向に設定した。第1次調査7号トレンチを延長する位置に設けたため、古墳中軸線よりもやや南に偏している。幅2.0mで、掘削可能な限り長めに設定したが、長さ11.3mに留まり、東端は障害物（立て看板）のため一部が不整形を呈する。地表面の標高は29.0mで、0.2m弱の表土直下は基盤土である花崗岩風化粘土・バイラン土となる。古墳墳端から幅6.6mの範囲に深さ約0.3mの浅い落ち込みが認められた。古墳築造時の地山整形の一端と考えられる。落ち込み内の覆土は暗褐色土で、自然に埋没した状況にある。また、東端付近で壺棺墓3基を検出したが、現状保存としたため詳細は不明である。遺物は、表土層から須恵器小壺片（Fig.6-1）が出土したほか、攪乱坑等から壺棺片（Fig.6-2～3）、弥生土器片が出土した。

#### (2) 202号トレンチ Fig.5、PL.2

くびれ部側面に古墳長軸と直交するトレンチを意図したが、樹木や廃材に阻まれたため、やや後円部より偏している。幅1.5mで、19.2mの長さを掘削した。平坦地部分の地表面の標高は27.5m前後で、0.1～0.3mの表土下は花崗岩風化礫を多量に含むバイラン土である。墳丘側では古墳盛土の一部を検出しがたが、他は全体的に削平が著しく、客土（水田耕作土）が盛られていた。トレンチの中途から丘陵斜面に向かって急激に落ちていくが、本来の地形を保っているとは見なし難い。古墳盛土周囲の表土層から須恵器片（Fig.6-4～6）が出土したほか、弥生土器、壺棺、黒曜石片が出土した。

#### (3) 203号トレンチ Fig.5、PL.3

後円部后面に古墳長軸方向に設定した。第1次調査12号トレンチを延長する位置に設けたため、古墳中心線よりも僅かながら北に偏している。幅1.5m、長さ12.5mを測る。地表面の標高は28.3mで、0.3m下に花崗岩風化礫を多量に含むバイラン土が現れる。墳端から6.0m前後の幅で極く浅く窪んでいるが、土層の堆積状況からは地山整形とは見なしがたい。他のトレンチ同様、開墾などにより著しい削平を受けたものと考えられる。表土層から壺棺片（Fig.6-7）、弥生土器片が出土した。

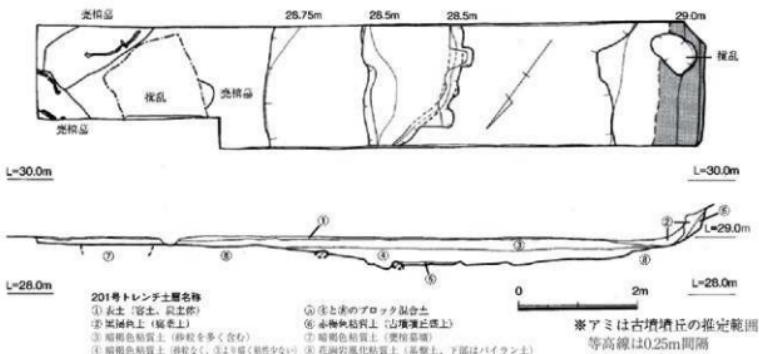


Fig. 4 201号トレンチ (1/80)

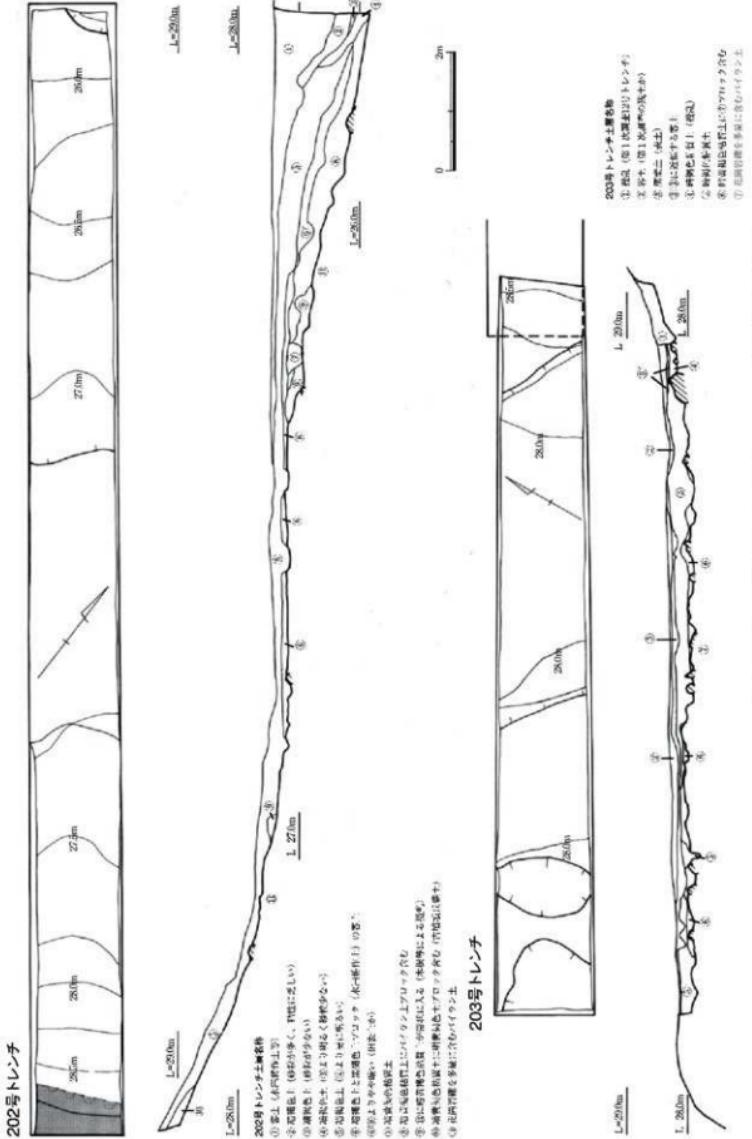


Fig. 5 202号・203号トレーナ (1/80)  
等高線は25cm間隔

(4) 各トレンチの出土遺物 Fig.6

1は須恵器小壺の口縁部片で、口唇部を肥厚させる。2、3は成人壺棺の破片で、接合しないが同一個体とみられる。T字形の口縁部直下に三角突帯をまわし、胴部下位には山形突帯を貼り付ける。4、5は須恵器壺の胴部片である。4は外面に擬格子目印き、内面に青海波當て具痕がある。5は外面の平行印き、内面の当て具痕をともに半スリ消し調整する。6は須恵器大壺の頭部片で、内面と屈曲部外面はヘラなで調整。7は成人壺棺の口縁部片で、口唇内面を肥厚させる。

(5) 墳丘について Fig.7

第1次調査報告書では、作図ミスのため墳丘に対するトレンチの位置が後円部側で1mほどズレている。今回それを補正したものを示した(Fig.7)。これにより、石室が後円部の中心をやや外れた位置にあり、かつ開口方向が長軸と直交しないこと、後円部形が正円を描くことが判明した(Fig.15)。なお、後円部の北西側と南西側の膨みは石室の石抜き等の際の残土、前方部前面中央の膨みは防空壕を掘った際の残土とみられる。また、第1次調査の所見から、前方部の両側面は開墾などによる破壊と土盛りによる地形改変が特に著しいことが判明している。

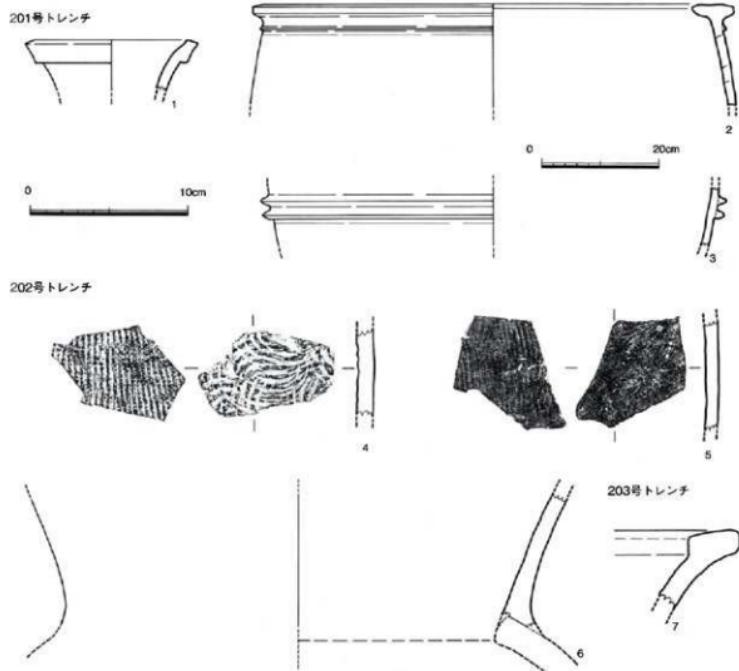


Fig.6 201号～203号トレンチ出土遺物 (2・3は1/8、他は1/3)

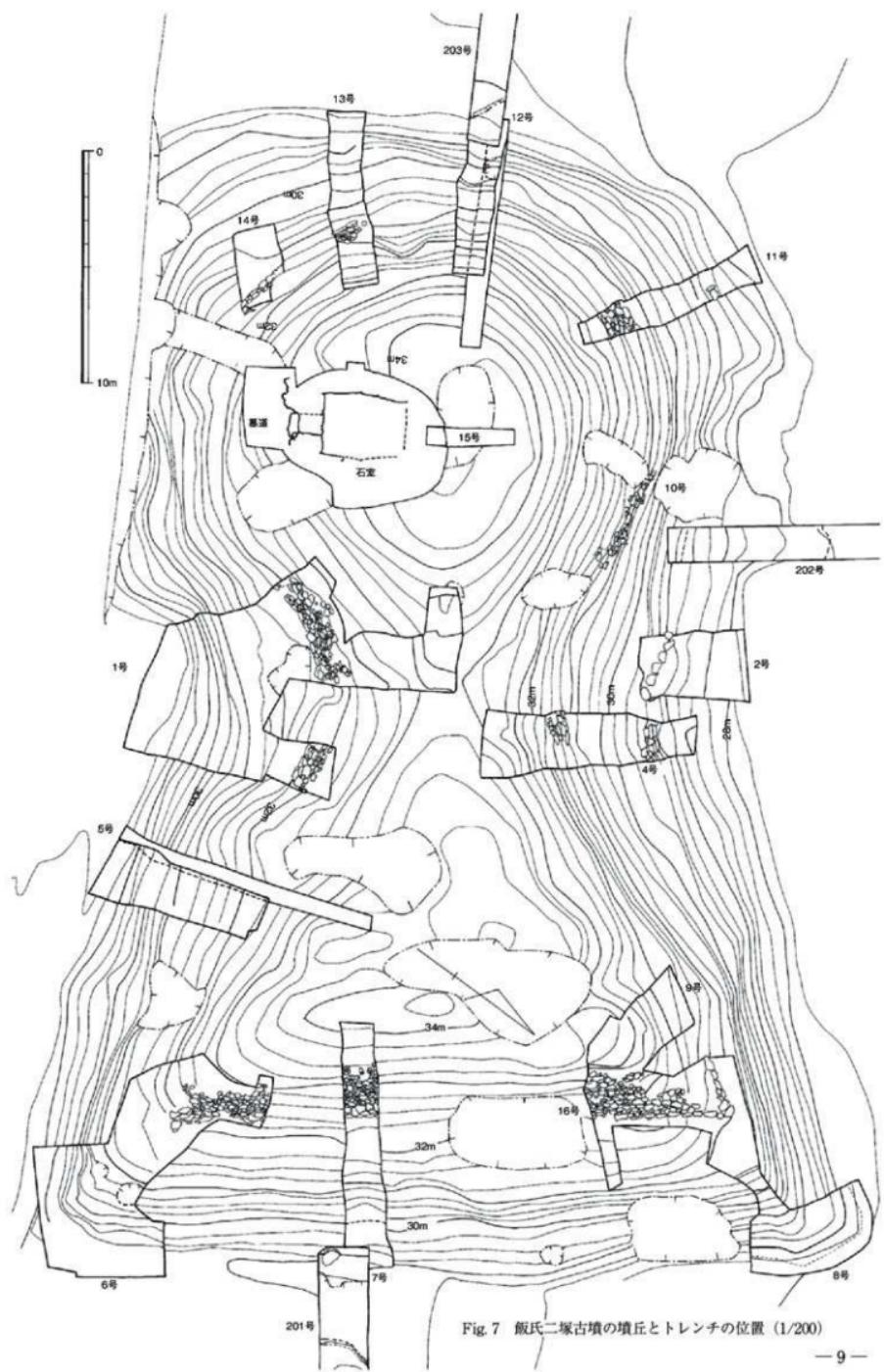


Fig. 7 飯氏二塚古墳の墳丘とトレンチの位置 (1/200)

## 4. 石室の調査

石室掘り方の確認、墓道構造の把握、実測図の補遺を目的として再調査を行った。石室の石材の抜き取りにより、後円部には $7 \times 6\text{m}$ の掘り鉢状の大穴が開いており、第1次調査と同様に、これを上から掘り下げて石室の調査を行った。後円部頂から石室床面まで48mを測る。

### (1) 掘り方 Fig.8~10, PL.4~6

石室の奥壁と両側壁方向に幅0.8mのトレンチを設け、墓壙掘り方が確認できるまで掘り進めた。その結果、3者ともに古墳築造前の旧表土（灰黒色粘質土）を認めることができ、これを掘り込んで墓壙が設けられていることを確認した。旧地表面のレベルは、奥壁では標高29.9m弱、石室床面から約0.35m、同様に西側壁では標高29.7m、床面から0.2m、東側壁では標高30.1m、床面から0.6mの位置にある。掘り方の全容は不明だが、幅5.1m、奥行き6.1mほどの方形プランとなろうか。裏込めには土砂が充填されるが、礫は含まない。また、墳丘盛土は全て版築によるが、上層部には腐植土と考えられる帶状の黒色土層が複数枚認められる。遺物は、墳丘盛土から弥生土器片が出土した他、古墳築造前の旧表土に山陰系の古式土師器が含まれていた。

### (2) 墓道 Fig.8・11・12, PL.7・8

閉塞部分は、石室開口部に民家があるため第1次調査では墓道からの調査を行っていない。今回は石室同様、上から掘り下げることによって部分的な調査を敢行した。調査区は樹木を避けて掘削可能な範囲を対象としたため、西側に偏したいびつな形をなすが、東西3.5m、南北2mを測る。

結果として、第1次調査でも確認された閉塞石両側の石積みは、石室主軸と直交する方向に大きく開き、墓道側壁の貼り石となることが判明した。閉塞前面の埋土は版築によって非常に堅く締められているが、貼り石を境にして墳丘側の版築とは状況が異なっている。このことから、貼り石で飾られた前庭部が開いていた一時期が存在し、被葬者埋葬後に版築により墓道が閉じられたことが分かる。墓道床面は花崗岩風化土の上に旧表土層と見られる黒色土層が堆積しており、地表面をそのまま墓道床面としていたようである。

掘削時の所見では、閉塞石天端付近までは盜掘坑によって搅乱を受けていた。しかし、閉塞石前面では溝状の墓道と見られる壁面の一部が検出できたため、半裁して掘削したが、搅乱坑により不明瞭であったため撮影のみに留めて掘り下げを継続した。掘削後、南壁の土層断面の観察により、これがやはり追葬時の墓道と思われる溝状の窪みであることが分かった。この墓道は幅1.4mほどで、閉塞石の横幅にあわせて掘られたものと推定され、長さ1.7mを確認した。やはり版築により閉じられている。

墓道内の版築層からは須恵器甌、环類の小片などが出土したが、上記のような状況であったため、各々の埋葬の時期を押さえることはできなかった。第1次調査では、古墳くびれ部などより出土した須恵器が、古・新の2相に分類できると報告されており、あるいはこれが埋葬の2時期を示す遺物であるかもしれない。また、盜掘坑からは中世の龍泉窯系青磁片などが出土し、古墳が破壊された時期を示している。

### (3) 閉塞 Fig.13, PL.7

閉塞石は石材の抜き取りによりやや東に傾いた状態にある。床面には浅い段が認められた。狭道は片側の袖石のみ残り、この袖石の小口面に板石を立てかけて閉塞としており、他方の袖石も同様の状

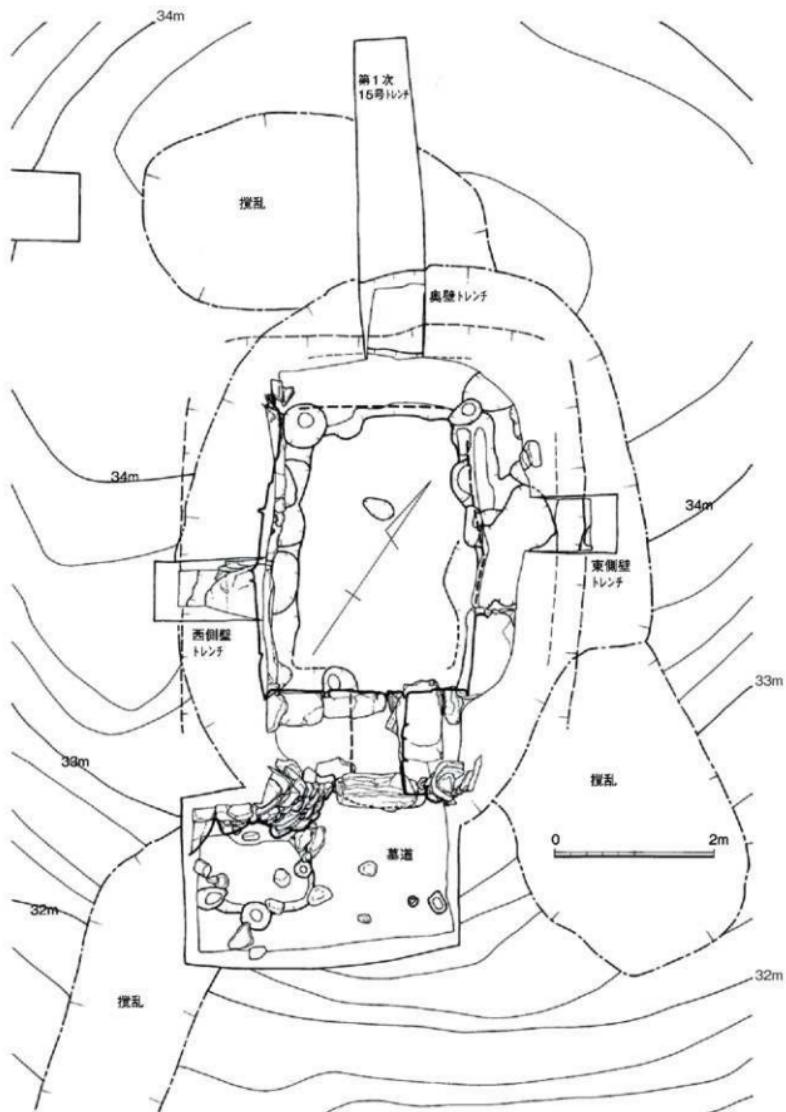
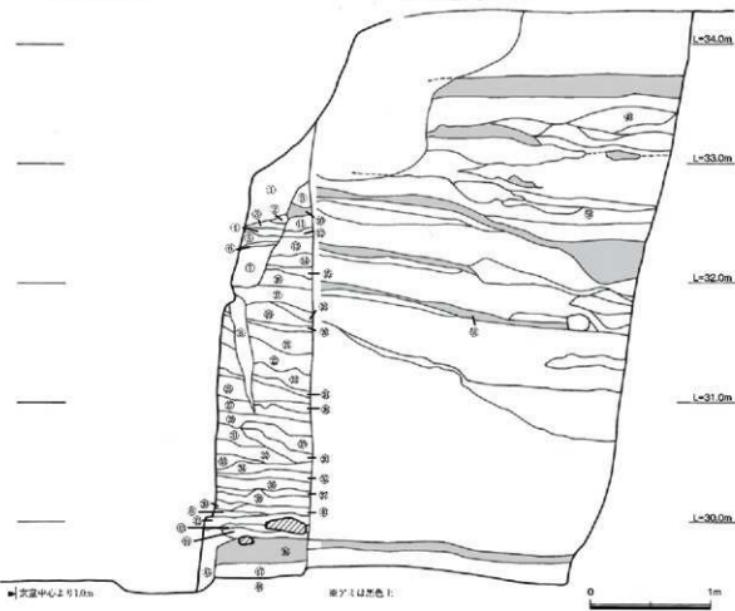


Fig. 8 石室の調査区と掘り方 (1/60)

## 奥壁トレンチ西壁

## 第1次調査15号トレンチ



## 奥壁トレンチ西壁土層名

- |                         |               |                             |
|-------------------------|---------------|-----------------------------|
| ① 暗黄褐色土 (複屈)            | ①～⑦は地滑りによる断面か | ⑨ ⑩近似                       |
| ② 黒褐色土                  |               | ⑪ 暗褐色土                      |
| ③ 暗黄褐色土                 |               | ⑫ ⑬に近似しやや暗い                 |
| ④ 黒褐色土                  |               | ⑭ 暗褐色土                      |
| ⑤ 暗黄褐色土                 |               | ⑮ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック      |
| ⑥ 黒褐色土                  |               | ⑯ 暗褐色土 (砂粒含む)               |
| ⑦ 暗黄褐色土                 |               | ⑰ 暗褐色粘質土 + 暗褐色土ブロック         |
| ⑧ 暗褐色土 + 暗黄褐色土 (木根跡)    |               | ⑱ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック      |
| ⑨ 暗黄褐色土                 |               | ⑲ 暗褐色土                      |
| ⑩ 黑色土 (高植土)             |               | ⑳ 既に近似しやや明るい                |
| ⑪ 暗褐色土 + 暗黄褐色土粒         |               | ㉑ 既に近似し更に明るい                |
| ⑫ 既に近似するが暗黄褐色土粒が少ないと記載  |               | ㉒ 明灰黑色粘質土                   |
| ⑬ 既に近似するが暗黄褐色土粒が更に少ない記載 |               | ㉓ バイラン土 + 黑色土粘質土            |
| ⑭ 既に近似や暗い記載             |               | ㉔ 灰黑色粘質土 (崩の再堆積)            |
| ⑮ 暗褐色土                  |               | ㉕ 暗褐色粘質土                    |
| ⑯ 既に近似記載                |               | ㉖ バイラン土 + 黄褐色粘質土ブロック        |
| ⑰ 暗黄褐色粘質土 + 暗褐色土ブロック    |               | ㉗ バイラン土 + 黑色土粘質土            |
| ⑱ 暗褐色土                  |               | ㉘ 灰黑色粘質土 (砂粒多く含む) 古墳築造前の表土  |
| ⑲ 暗黄褐色粘質土 + 暗褐色土ブロック    |               | ㉙ 暗褐色粘質土 (砂粒多い) 古墳時代前期遺物包含層 |
| ⑳ 暗褐色土                  |               | ㉚ 花崗岩砕石を含むバイラン土 (基盤土)       |
| ㉑ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック  |               |                             |
| ㉒ 既に近似、意味が少ない記載         |               | ㉛～㉜は第1次調査所見                 |
| ㉓ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック  |               |                             |
| ㉔ 暗黄褐色粘質土 + 暗褐色土ブロック    |               |                             |
| ㉕ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック  |               |                             |
| ㉖ 暗褐色粘質土 + 暗褐色土ブロック     |               |                             |
| ㉗ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック  |               |                             |
| ㉘ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック  |               |                             |
| ㉙ 暗褐色粘質土 + 暗黄褐色粘質土ブロック  |               |                             |
| ㉚ 花崗岩砕石を含むバイラン土 (基盤土)   |               |                             |

Fig. 9 石室トレンチの土層断面・I (1/40)





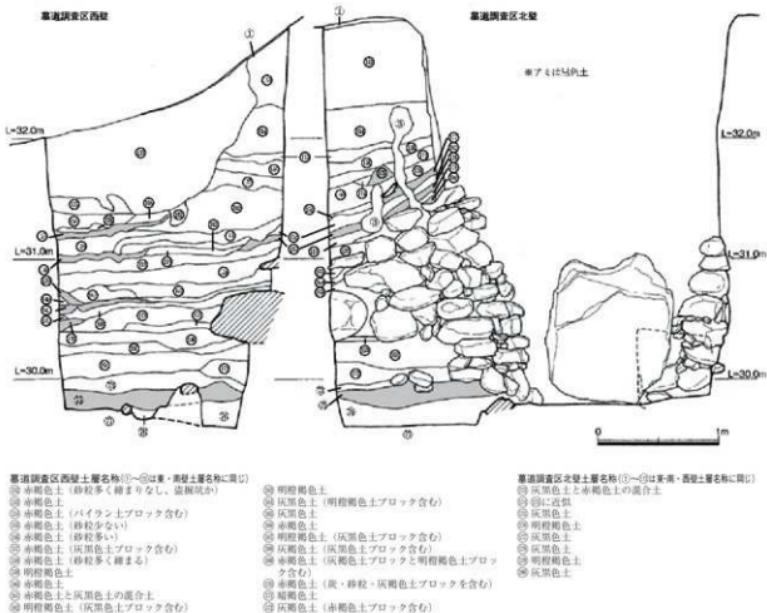


Fig. 12 墓道調査区の土層断面・II (1/40)

況にあつたとすれば、羨門幅は0.7～0.8m程度と考えられる。

#### (4) その他 Fig.13

第1次調査の石室実測図に不備（下ばの記入漏れ）があつたため補足した。石抜き跡の形状から、玄室床面は図に示したような胴張りのある長方形プランとなろう。法量は、玄室玄門側で幅2.6mを実計測できるが、他は推定で奥壁幅2.3m、玄室長3.6mとなり、長幅比3:2程度の玄室とみられる。

玄室床面は地山土である花崗岩風化土が露呈するが、壁まわりは汚れた地山土で埋められており、石室基底部を構築する際の掘り込みを示すものであろう（Fig.8）。

#### (5) 出土遺物 Fig.14

8は弥生土器高坏の脚部で、外面は丹塗り磨研を施す。閉塞石のすぐ前面（追葬時の墓道内）で出土した。9、10は古式土師器の二重口縁壺である。9は石室の奥壁トレンチの旧表土層から出土しており、古墳建造前に当該期の遺構があつたことを示す遺物である。11は須恵器甌の小片で、肩部に波状文を巡らす。墓道内より出土した。12は越州窯系青磁の碗、13は龍泉窯系青磁で、ともに盜掘坑より出土した。14は扁平片刃石斧で、基部を少し欠損する。15は柱状片刃石斧で、基部のみの残欠であるが、再加工を加えた痕跡がある。14、15ともに頁岩製。16は安山岩製の削器で、下半は欠損する。両平坦面から加工を加えて一側辺に刃部を作り出し、他側辺は刃潰し加工している。17は黒曜石製の

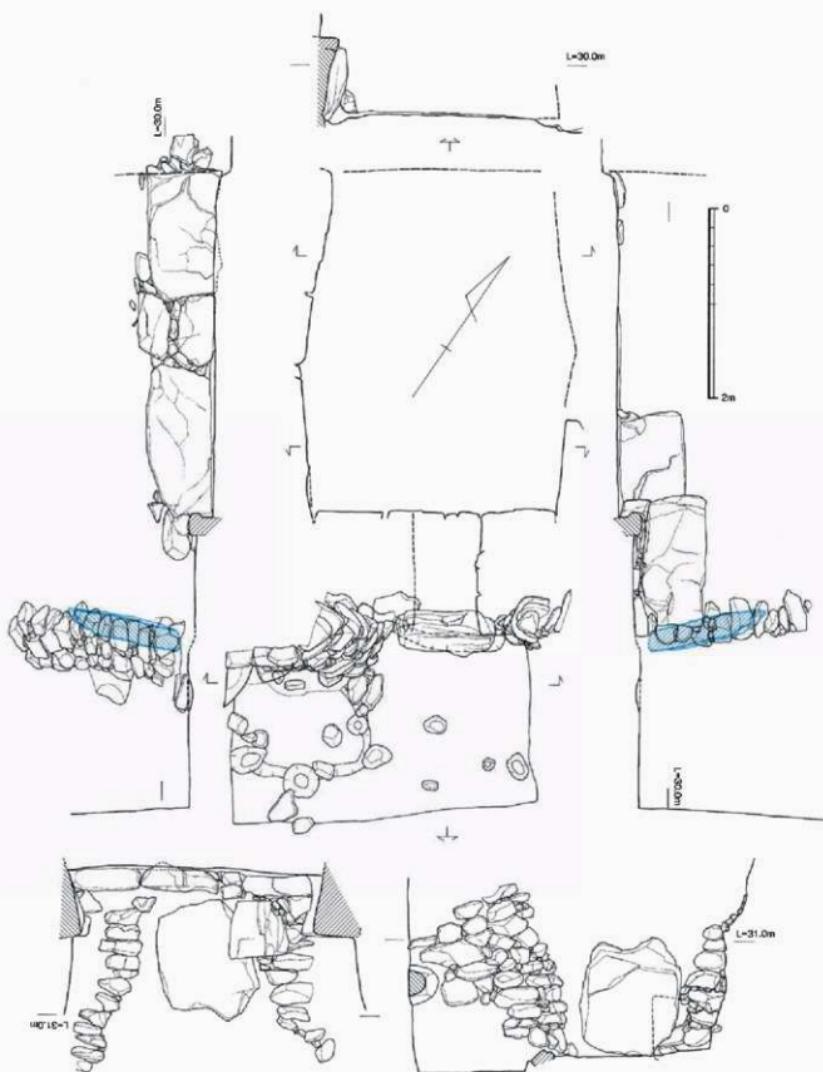


Fig. 13 橫穴式石室 (1/50)

石棺である。剥片剝離技術からみて縄文時代早期に位置付けられよう。この他、黒曜石チップも少量出土している。

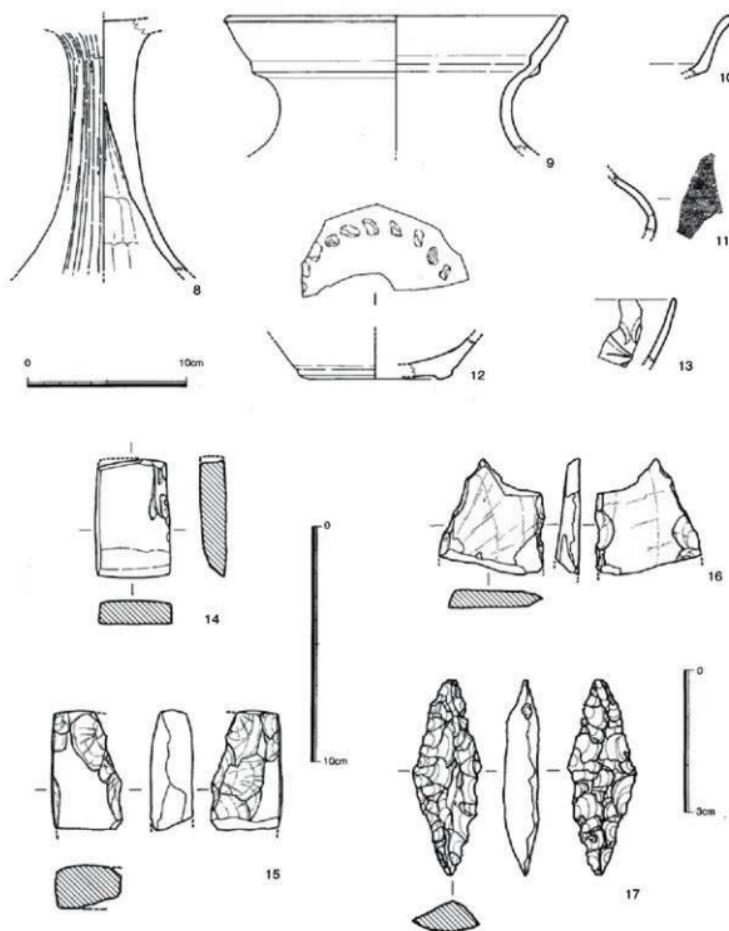


Fig. 14 墓道・石室調査区の出土遺物 (14～16は1/2、17は1/1、他は1/3)

### 第三章 おわりに

以下、新たに得られた知見を列記して、第2次調査のまとめとする。本書で触れていない事項については変更がないものとして第1次調査報告書を参照されたい。

古墳は周溝を持たない。古墳周囲の平坦面は著しく削平を受けているものの、平坦面自体は古墳造営時に地山整形により大凡の形が造られたものと考えられる。前方部前面と後円部後面の地表面の比高差は0.7mでほぼ平坦といえよう。また、墳丘下及び周辺には弥生時代中期を中心とする墓地と、古墳時代前期の集落跡が広がる。

墳丘測量図に誤りがあったので、正しい図を示した。石室は後円部の中心をやや外れた位置に設けられており、開口方向は古墳長軸に直交せず、若干後円部方向に軸をとる。後円部は正円を描き、1・2段とも外形はほぼ確実な線を引くことができる。前方部は2段目の外形は確実だが、1段目は特に古墳の南側と北側で後世の変更が著しく、葺石がほとんど残っていないため不確定な部分を残しているが、第1・2次調査の所見から推定される墳丘復元図を示しておく(Fig.15)。この復元案が正しければ、古墳の規模は全長49.6m、後円部径27.3m、前方部幅36.9mとなり、第1次調査の所見より一回り大きな数値が得られる。また、長軸方位は磁北より約53度東偏する。

石室は旧表土面を浅く掘り窪めて掘り方をしている。掘り方のプランはおそらく方形と考えられる。規模は $5.1 \times 6.1$ m程度である。石室については実測図の補足を行い、計測値に若干の変更があった。詳細は本文を参照されたい。

最低2回の埋葬を示す墓道を確認した。古い墓道は、閉塞石両脇の墓道壁が石室開口方向とほぼ直角に開き、壁面に礫を貼り付ける特異な構造を示す。丁寧な版築によつて固く閉じられている。新しい墓道は閉塞石幅ぎりぎりに設けられた溝状のものであったと考えられるが、調査範囲が狭く全容の解明には及ばない。やはり版築により埋め戻されているが、やや雑な印象を与える。いずれも明確な時期を示す遺物に恵まれなかつた。

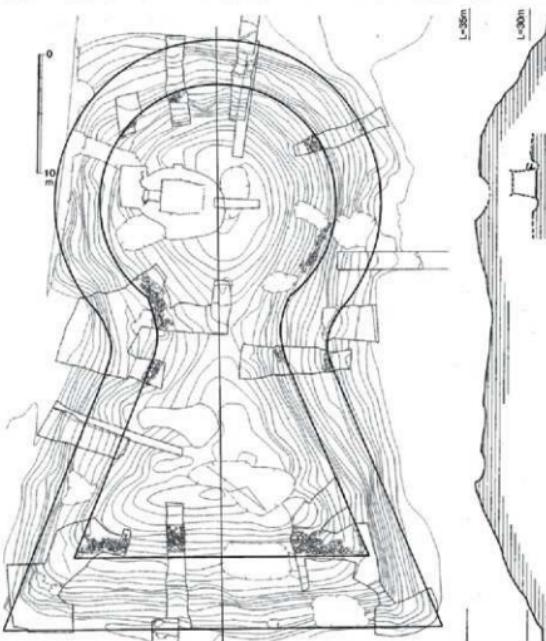


Fig. 15 飯氏二塚古墳墳丘復元案 (1/400)

## PLATES



(図 版)





1. 201号トレンチ全景（北東から）



2. 201号トレンチの地山整形（北から）



3. 201号トレンチ全景（西から）



4. 銃棺墓検出状況（東から）



1. 202号トレンチ全景（北西から）



2. 202号トレンチ填端部分（南東から）



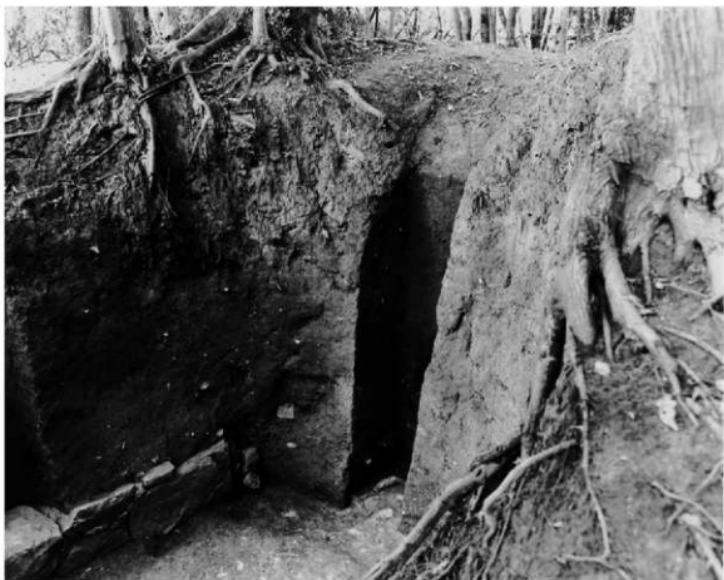
3. 202号トレンチ段落ち部分（東から）



1. 203号トレンチ全景（北から）



2. 203号トレンチ全景（南から）



1. 石室奥壁トレンチ（東から）



2. 石室奥壁の掘り方（東から）



1. 石室西側壁トレンチ（東から）



2. 石室西側壁の掘り方（東から）



1. 石室東側壁トレンチ（西から）



2. 石室東側壁の掘り方（西から）



1. 墓道から石室を望む（南東から）



2. 墓道調査区南壁土層断面（北西から）



1. 墓道調査区西壁土層断面（北東から）



2. 墓道調査区東壁土層断面（南西から）

飯氏二塚古墳 2  
- 飯氏二塚古墳第2次調査報告 -  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第780集  
2003年（平成15年）8月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
印 刷 日の出印刷株式会社  
福岡市東区香住ヶ丘6丁目7-23